



第 94 号

高 嶋 英 弘
KCCN 理事
京都産業大学法学部教授

京の湧水と井戸

先日、平安時代の内裏にあった建物「登華殿(とうかでん)」と「弘徽殿(こきでん)」の跡が、京都市上京区で見つかったとの報道がありました(2021年11月8日付京都新聞ウェブサイト

<https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/672462>

<https://www.kyoto-np.co.jp/articles/-/672464>)。これらの名称は、「源氏物語」や「枕草子」の舞台として耳にされた方も多いと思います。平安時代の内裏(天皇の居所、いわゆる「御所」のことです。)は、上京区の「浄福寺通」と「新出水通」の交差点付近に存在したことが判明していますが、平安時代の内裏殿舎遺構が見つかるのは初めてということです。今回のKCCNニュースでは、このニュースを契機として、平安朝期の内裏の水事情を考えてみましょう。

当時の内裏は、天皇の居所であり政治の中心としての機能を有していましたから、そこには多数の官僚や公家が生活していたはずですし、その生活を支えるために清潔な飲料水の確保が必要不可欠であったことも明白です。ひょっとすると、曲水の宴を開くための流水も必要だったかもしれません。

当時から、北山に端を発した京の地下水は、平安京の北側に広がる紫野を経て、千本通や堀川通の地下を流れ、丸太町通の辺りで湧水として地表に現れていました。このことを裏付けるのが、千本丸太町北側の「出水」という地名や、「雨乞い小町」で知られる二条城南の「神泉苑」です。豊臣秀吉によって築城された聚楽第の遺構も近くにあります。このことからすれば、平安時代の内裏も、聚楽第も、二条城も、この湧水があったからこそ、この付近に作られたといえそうです。プラタモリでもこの辺りが数度にわたって放映されていましたが、残念ながら地下水脈に言及した回はありませんでした。最近公開された立命館大学の「平安京跡データベース」

(<https://heiankyoexcavationdb-rstgis.hub.arcgis.com/>)

をみますと、この湧水地周辺に歴史的建造物が集中していることがよく分かります。

この水脈は、地表に現れる前は井戸として使われています。紫野にある大徳寺の塔頭はそれぞれ著名な茶室を備えていますし、堀川通のすぐ東側には、表千家、裏千家、武者小路千家の三千家が軒を連ねています。これらの存在は、豊富な地下水を得ることのできる井戸が前提であることは言うまでもありません。

(次ページへ続く)

現在でも、大徳寺から上長者町あたりまでは豊富な井戸水を使った豆腐屋さんがたくさん営業しており、嵯峨の「森嘉」よりも美味しい豆腐が街角で手に入ります。浄福寺上長者町の豆腐屋さんが私の評価では一番だったのですが、最近廃業されたのは残念です。浄福寺上長者町は、「高台院町」という現在の町名が示すとおり、まさに平安時代の内裏があったところですから、内裏で使われていた水脈を使った豆腐だったというわけです。

実は、私の自宅も大徳寺と弘徽殿跡の中間地点にあり、ちょうどこの水脈の真上に当たります。そして、我が家に古くからある 2 本の井戸は、いまでも現役で炊事・洗濯・お風呂に使われています。平安京の水脈を今に伝える井戸水で点てるモーニングコーヒーは格別ですので、我が家へお越しの際はぜひご笑味下さい。手動ポンプも備えていますので、大地震等の自然災害の際にも役立ちます。

(2022年1月)